

文芸

俳句

秋夕焼あきゆやけやつぱり生きてたのしもう
 池田 逸子
 秋灯しゅうとうのあかるき無人精米所
 伊藤 敬子
 満ちる月縁側つきせき棧敷せき盃さき二つ
 今関満喜子
 離るるも名月一つ君想う
 魚地 照子
 行く人の影も明るき花野かな
 江森 悦子
 諸喰へば生きてる限り戦後あり
 川島 通則
 名月や影を揺らして露天風呂
 向後 寛
 納骨の背に初冬の雨しとど
 越川せつ子
 腰痛や影まで曲る敬老日
 小松 藤男
 秋風鈴風あきかぜをいぎなう樹の翳かげり
 佐瀬 輝夫
 今日一日ずばらに過し大根炊く
 椎名万里子
 どの子にも太陽当る運動会
 市東富美江
 屑大根食べて生産農家なり
 鈴木とし子

短歌

目に触れる朽ちゆく草木冬初め
 土屋美枝子
 一人来て秋の浜辺に佇みぬ
 土屋 義昭
 幾星霜いくせいとう十六夜の月しみじみと
 戸村 静華
 日に五本ボトルを空からの夏果てる
 早川 勇
 里山の恵みふんだんきのこ汁
 藤田 雅夫
 有り難うと言ひつつ握る亡き夫の
 手の温もりを未だ覚えり
 田崎 尚美
 百舌歳大僧正のご葬儀に
 僧衣そういの列が長くつづけり
 鈴木まさ子
 音のするガラス戸のあたりふり見れば
 夕茜ゆさきに染む蜻蛉とんぼがいたり
 浅野 榮子
 いつの間に金木屋の咲き始め
 夫逝き秋の五たび巡りく
 芹川 初子
 腰折れの皇帝タリヤがつぶやきぬ
 倒るる前に支へ欲しかり
 青木 秀子
 ひと口に食みてしまへる里辛を
 いとしみながら剥むきてゆきたり
 押尾 輝子
 庭先に雀らのゐる水たまり
 しぶき小さく光りてあがる
 水須 俊
 音一つたてず行き交う修業僧の
 姿を拝す永平寺の廊
 加瀬 弘子
 五十年過ぎて未だ覚えおり
 藁屋根にして土間のある家
 椎名美枝子
 髪に挿し花束にする女の子等は
 コスモス咲く中声を弾ます
 西山満里子
 伏しがちの吾にひたすら寝ていろと
 医者と思へぬ友の言ことばい様
 島田ますみ
 川岸は黄き一色の泡立草
 外来植物の強さを見する
 斎藤つね子

 袖子の実を湯舟に浮べ瞑想し
 立冬の季節早おとずれし
 夕映えて田んぼの果までとどく陽は
 老いの命の愛しむように
 越川 義則
 からからと庭に舞おりかけ廻り
 風静まれば落葉散りばむ
 高梨 キヨ
 内藤 くに

作品展

- 町民会館ミニギャラリー
12月 俳句会
1月 水墨画クラブ
- 文化会館ロビー展
12月 展示なし
1月 絵手紙ひかりの詩
- サビア展
12月 アート押し花クラブ
1月 写友会
- 銚子商工信用組合展
12月 華舟会
1月 アート押し花クラブ

こうほう博物館 93

鍋かぶりの鉄鍋

鎌倉・室町時代の中世では、ご飯を炊いたり、野菜を煮たりするのに、主に写真のような鉄製の鍋が使われた。縁の片側にはお銚子の様な注ぎ口が付いていて、そこから汁が注げるようになっていた。この鉄鍋は当時とても高価だったため、錆びたり孔が開いたりしたら、錆掛屋に修理して長く使われた。そのため遺跡から出土することは、あまり多くないが、篠本では鉄鍋が二点出土し、そのうちの一つが写真のものである。そしてその二点は、いずれも墓穴から出土したのである。



▲篠本新台遺跡から出土した鉄鍋

あり、不治の病で亡くなった者の病や霊を封じするために被せたといわれ、江戸時代初めに多く見られた。鍋被りは山口市妙宣寺の日親上人の話や、今でも滋賀県米原の祭鍋(冠祭)でもある。食べ物の煮炊き以外にも、意外な使われ方をした鉄鍋である。
 (社会文化課 道澤 明)